



TITLE:

なぎなたの変遷に関する歴史社会
学的研究——武士の武器、女性の
武道、そして国際発展——(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

BELLEC, CHLOE ANNE HELENE

CITATION:

BELLEC, CHLOE ANNE HELENE. なぎなたの変遷に関する歴史社会学的
研究——武士の武器、女性の武道、そして国際発展——. 京都大学,
2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-09-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20720>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	BELLEC, CHLOE ANNE HELENE
論文題目	なぎなたの変遷に関する歴史社会学的研究 ——武士の武器、女性の武道、そして国際発展——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、なぎなた（「なぎなた」というのは第二次大戦後の表記であり、それ以前は「薙刀」、さらに近世以前は「長刀」と表記されることが多い）が、武士の武器から女性の武道に変化した歴史を、特にジェンダーの観点から明らかにするとともに、なぎなたの国際発展によってもたらされた、現代におけるなぎなたの変容を論じたものである。</p> <p>序章において、問題関心や研究方法が述べられた後、第1章では、中世から江戸時代までを対象に、女性と薙刀（長刀）との関連性が検討されている。中世において長刀は男性の武器であり、女性が長刀を使うことはまれなことであった。近世になると薙刀は武器として用いられなくなったが、江戸時代では、武家女性が薙刀の稽古をするようになったことが、断片的な史料から明らかになるという。そして、江戸時代の通俗的な絵入りの読み物である草双紙を検討すると、男性よりも女性の方が薙刀を用いている絵が多く掲載されているが、女性は薙刀よりも弓矢や刀などの武器を利用している絵の方が多く載っていた。つまり、薙刀は女性の方が使うものと考えられてはいたが、女性が薙刀のみを用いていたということはできないと、学位申請者は指摘している。</p> <p>第2章では、「列女伝」や薙刀の教本の分析を通じて、1910年代から1920年代にかけて、いかにして薙刀が女性にふさわしいものとされていったのかが検討されている。「列女伝」とは、1870年代から1910年代まで刊行された有名な女性の史伝であり、教訓書として用いられていたが、「列女伝」に掲載されている図像には、薙刀をもった女性の姿があるものの、薙刀よりも刀をもった女性の方が圧倒的に多かった。また1910年代までの薙刀の教本においては、薙刀教育の対象は女性に限定されておらず、男女が対象とされていた。しかし薙刀が、1910年に師範学校の女子生徒の課外活動として認められ、それが1914年に高等女学校などにも拡大していくにつれて、薙刀教本の対象は女性に限定されていくことになる。その結果、薙刀は、女性がするにふさわしいように、試合形式ではなく、「形」の稽古を中心としたものに変化していった。またこのような女子教育における薙刀教育の広がりをうけて、薙刀教本や薙刀について言及した雑誌や新聞の記事では、薙刀と女性の優美さとの関係性が強調され、薙刀を用いたとされる歴史上の人物として、武蔵坊弁慶のような男性を取り上げることがなくなり、女性の例だけが言及されるようになったことが指摘されている。</p> <p>第3章では、戦時下において、薙刀が女子師範学校や高等女学校などで、1936年には正課として、1943年には正課必修として教育されるようになったことが論じられている。歴</p>			

史的にみれば、薙刀教育を受けていたのは武家女性であったが、その歴史が参照され、現実の女性と武家の女性とのつながりが強調されていった。薙刀教本では、薙刀をもって戦ったとされる貞節な女性が頻繁に登場しており、この教本を通して当時の女性たちは、婦徳を涵養し、家庭を守りながら戦争に協力することが奨励された。性別役割分業を前提に、男性が将来の兵士として前線で戦うために、剣道や柔道の教育を受けたのに対して、女性は銃後を守る精神を涵養するために、薙刀教育を受けたことになる。

第4章では、戦後、なぎなたがスポーツとして位置づけなおされ、国際発展したことが、なぎなたにどのような影響を与えたのかが考察されている。日本ではなぎなたは女性のもので広く認識されていたため、1960年代に海外へなぎなたが普及しはじめた時、その対象者は当然女性であった。しかし1990年ころから男性がなぎなたをはじめ、やがてヨーロッパを中心に、なぎなたの愛好者は男性の方が圧倒的に多くなっていった。というのも、海外でのなぎなたのイメージは、僧兵と武士が戦場で用いた武器というものであり、それを通して普及が図られたからである。その結果、全日本なぎなた連盟は、なぎなたの創立国としての面目を保ち、世界なぎなた選手権での勝利を確固たるものとするために、日本国内における男性へのなぎなたの普及を図っていった。全日本なぎなた連盟は、男性の武器としてのなぎなたの歴史的側面に光をあてることで、なぎなたは女性がするものという、それまでの「伝統」を変更したのである。

終章では、各章のまとめが行われ、なぎなた（薙刀）が女性のものか、男性のものが論じられるたびに、その歴史を通じて議論が正当化されていったこと、そしてなぎなた（薙刀）を手にする歴史的人物の例を通して、なぎなた（薙刀）のジェンダー性が定義されてきたことが、本論文の結論として述べられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、なぎなた（長刀・薙刀）が、武士の武器から女性の武道に変化した歴史を、特にジェンダーの観点から明らかにするとともに、なぎなたの国際発展によってもたらされた、現代におけるなぎなたの変容を論じたものである。このような観点からのなぎなた（長刀・薙刀）に関する歴史研究は、これまでほとんど行われておらず、その点で本論文は斬新な問題関心に基づいた研究であるといえることができる。

具体的に本論文の研究上の意義を述べれば、その第1点目は、言うまでもなく、なぎなた（長刀・薙刀）の歴史的変遷をジェンダーの視点から明らかにしたことである。なぎなた（薙刀）を女性向けの武道としてとらえることは、日本においてさほど疑われることのないものであり、武蔵坊弁慶のような僧兵が手にした長刀と、戦前の女子教育で行われてきた薙刀教育との断絶は、これまでほとんど追究されてこなかった。しかし、学位申請者はこの点に疑問をもち、なぎなた（薙刀）が女性のものであるというとらえ方は、歴史的に創られたものであることを明らかにしている。

長刀（薙刀）が武器としての役割を終え、武家女性に対して薙刀の教育が開始されていった江戸時代において、草双紙を通して明らかになるのは、薙刀を操るのは男性よりも女性が多かったが、女性は薙刀よりも刀や弓矢を用いる例の方が多かったということである。女性と薙刀との結びつきは強固なものではなく、この傾向は明治期に刊行された「列女伝」においても見られ、事実、20世紀初頭までの薙刀教育は、女性のみを対象とするものではなかった。しかし1910年代になって、薙刀が高等女学校や女子師範学校の課外活動として導入されると、薙刀の女性化がはじまっていくことになる。そして薙刀が高等女学校などで1936年に正課に、1943年に正課必修となったことにより、薙刀と女性との結びつきは揺るぎないものとなっていった。ところが1990年代にヨーロッパを中心に男性のなぎなた愛好者が増加し、なぎなたが男性のスポーツとしてとらえられるようになると、全日本なぎなた連盟は男性へのなぎなたの普及を図っていくことになる。このことは、なぎなたは女性がするものというとらえ方に変更がもたらされたことを意味していた。

このように、なぎなた（薙刀）＝女性のものというとらえ方は、決して歴史を通して不変なものではなく、歴史的状況の変化によって変更がもたらされ、伝統が創られていったことが、本論文によって明らかになったのである。

本論文の第2の意義は、なぎなた（薙刀）の位置づけが変化していくとき、歴史が参照されていることを明らかにしたことである。そもそも、薙刀に関する史料は多くないため、学位申請者は傍証的な史料も含めて、さまざまな史料を渉猟し、それらを丁寧に読み解いている。その結果、薙刀が女性のものとされていくとき、長刀を用いたとは思われない、巴御前や板額御前の例が出され、現代において男性へのなぎなたの普及が図られるときには、武蔵坊弁慶などの僧兵の例が持ち出されていることが明らかにされた。また戦時下において女性と薙刀の結びつきが強固となり、婦徳や国防意識の涵養がめざされたときには、薙刀を用いて戦った会津藩の中野竹子や薙刀で仇討ちを行った宮城野・信夫などの、国家にとって適切とは思われない人物が取り上げ

られていないことが指摘されている。このように、必要性に応じて歴史の取捨選択が行われ、伝統が創られていくことが、本論文によって明らかになったといえるだろう。

そして本論文の第3の意義は、薙刀が女性のもっととらえられるようになったことの結果として、薙刀のあり方にも変化が見られることを明らかにしたことである。もともと薙刀（長刀）は武器であるが、女性が薙刀教育を受けるようになると、それは、試合形式ではなく、「形」の稽古を中心としたものに変化していった。また薙刀は女性の優美さや女らしさと結びつけられて、女子に適した武道であることが強調されていき、薙刀の修練は婦徳の涵養と関連づけられていく。そして薙刀を用いた貞節な武家の女性が参照されることで、薙刀の稽古をすることは妻・母としての役割に結びつくこととされ、家族に武士的精神を養うことが薙刀教育の目的とされていった。薙刀が女性化すると、薙刀自体のあり方や意味づけに変更がもたらされたことになる。

このように、本論文はなぎなた（長刀・薙刀）の歴史研究として従来にない斬新なものであるが、今後検討すべき課題が残されてもいる。たとえば、薙刀が女性化していく過程で薙刀のあり方が変化したのであれば、現代における男性へのなぎなたの普及が、なぎなたにどのような影響を与えているかという問題が、当然検討されるべきであろう。ただこの点は、研究のさらなる発展のための課題として残されたものであり、これによって本論文の価値が損なわれるものでないことはいうまでもない。

よって、本論文は、人間形成過程における社会化の問題を解明することをめざす、共生人間学専攻人間社会論講座人間形成論分野の理念に適った論文であり、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年7月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降